

L^AT_EX 2_ε による文書処理

内藤正美

目次を入れるには、section, subsection コマンドを使って section や subsection のタイトルを書き、目次を入れたいところに `\tableofcontents` と書くだけです。タイプセットは、この場合も 2 回やります。1 回目に目次用のデータができ、2 回目のタイプセットで目次の内容が表示されます。

目次

1	文書処理とコンピュータ	1
1.1	L ^A T _E X 2 _ε による文書処理	1
1.2	参照の例	1

1 文書処理とコンピュータ

1.1 L^AT_EX 2_ε による文書処理

L^AT_EX 2_ε を使うと、論文や長いレポートなどの構造化文書を簡単に、そして美しく作ることができます。その理由の一つに、「相互参照」が容易であることがあげられます。

相互参照では、章や節や式や図面や表にラベル（名前）を付け、それらをそのラベルで（つまり、番号ではなく）参照します。そのため、図などの番号が変わっても、本文中でそれを参照するときに、自動的に正しい番号が出力されます。

次の節で、例を示します。

1.2 参照の例

ここで、shori というラベルの節を参照してみます。

この件については、第 1.1 節（1 ページ）を参照されたい。

このように、参照をするには、`\ref{参照相手のラベル}` と書きます。すると、そのところが参照相手の番号に置き換わります。参照相手が出てくるページを出力するには、`\pageref` コマンドを使います。

なお、ここで重要なことがあるので覚えてください。それは、「タイプセットを 2 回やる」ということです。1 回目のタイプセットで参照用のデータができ、2 回目のタイプセットでそのデータが読み込まれて節や図などの番号が表示されます（タイプセット 1 回だけだと、?? と表示される）。

画像や、自分で描いたグラフも、参照できます。例えば、図 1 は虎の絵です。このように、やはり `\ref{図の名前}` で参照します。



図1 ghostscript の虎の絵

今度は、数式を参照してみよう！

$$\sum_{k=1}^n k = \frac{1}{2}n(n+1) \quad (1)$$

$$\int_0^x t dt = \frac{1}{2}x^2 \quad (2)$$

(1) 式は和の公式、(2) 式は積分です。